

村瀬 正紘

1. 事業実施の目的

博士論文執筆に向けた考古学研究遂行のための実地調査

2. 実施場所

ペルー共和国ティンゴマリア市、ワヌコ市近郊

3. 実施期日

2025 年 7 月 4 日 (金) ～ 2025 年 10 月 1 日 (水)

4. 成果報告

●事業の概要

今回の渡航では、ペルー共和国のワヌコ市及びティンゴマリア市にて発掘調査を行った。具体的には、ワヌコ県ティンゴマリア市にあるクエバ・デ・ラ・ピラミデ遺跡での発掘調査に同行し、その後ワヌコ県ワヌコ市近郊にあるラクラプンタ遺跡、ワラバ遺跡、ミトゥマルカ遺跡、ニャウパマルカ遺跡、ナウヤンタンボ遺跡での試掘調査を実施したのち、同じくワヌコ市近郊に位置するクルスパタ遺跡での発掘調査に同行した。

まず、実地での発掘調査経験を積む目的で、東京大学総合研究博物館・金崎由布子氏によるクエバ・デ・ラ・ピラミデ遺跡調査に同行した。期間は短縮されたものの、昨年調査区をさらに掘り下げ、石灰質や生物由来の有機物といった自然堆積と人間の利用層が交互に重なる層位を確認した。報告者は2つの発掘区のうち1つの区画での作業補助を担当し、調査状況を金崎氏に逐次伝達しながら、当該区画および全体の発掘作業が円滑に進み、調査目標が達成されるように努めた。

次にワヌコ盆地の北部に分布するラクラプンタ、ワラバ、マルカマルカケパイナ、ミトゥマルカ、ニャウパマルカ、ナウヤンタンボの6遺跡で試掘調査を実施した。これらの遺跡は、報告者が予備的踏査において表面観察を実施した遺跡であり、そのデータ分析を通じてインカ帝国期に利用された可能性があると結論づけた遺跡である。それぞれの遺跡において1メートル四方の試掘坑を最大4ヶ所まで設定し、層位発掘を行った。発掘調査の結果、これらの6遺跡のうちラクラプンタ、ワラバ、ミトゥマルカの3遺跡において、インカ帝国に利用されていた特徴的な要素を持つ様式の土器の破片が出土した。ラクラプンタ遺跡では地表面の清掃によって昨年の予備的踏査では視認できなかった直角の壁を持つ建築が見つかった。直角の壁を持つ建築は、インカ帝国期における建築様式の大きな特徴の一つであり、円形から楕円形である在地様式の建築とは明確に異なる。さらに、その建築の内部にて発掘を行ったところ、床面と思われる層位から有孔の土器片が出土した。これはワヌコ地方の大規模な行政センターであるワヌコパンパやワヌコ盆地南東部のインカ期の遺跡であるイチュ遺跡で出土例のある、トウモロコシの醸造酒であるチチャ生産のための道具である可能性が高い。この有孔の土器片は、その次に実施したワラバ遺跡の発掘調査においても確認された。出土したのは、不規則に連接する在地様式の特徴を持った部屋状構造物の一面に設定した発掘区からであった。発掘の結果、当該区画には複数の生活面が確認され、在地の建築がインカ帝国による征服後も利用され続けた可能性

が示唆される。遺跡の利用時期と各時期に使用されていたモノの関係性については、年代測定による絶対年代の分析を今年度中に行い、実証的な考察を行う予定である。ミトゥマルカ遺跡では、直交する壁を持つ建築の床面と考えられる層の上面から、先述したチチャの容器として用いられたアリバロと呼ばれる土器の一部が見つかり、当該遺跡のインカ期における利用があったことが判明した。その他の遺跡からは、明確にインカ様式と関連づけられる遺物は確認されなかったが、土器片や炭化物が出土し、年代測定を含む今後の分析を行うための基礎的なデータを得ることができた。発掘調査後はそれぞれの遺跡から出土した遺物について記録と整理を行った。

その後、総合研究大学院大学人類文化研究コース博士後期課程の佐藤優音氏によるクルスパタ遺跡での試掘調査に参加した。クルスパタ遺跡はワヌコ盆地の西部に位置し、アンデス文明における形成期から地方発展期に利用されていたと考えられる基壇状建築を伴う遺跡である。試掘調査の結果、遺跡中央部のマウンドから形成期～地方発展期に製作されたと見られる土器が、また、遺跡東側～南東側に分布する2つの部屋状建築から、土器と炭化物、動物骨が出土した。報告者は調査区の設定の補助、遺跡の東側と南東側にそれぞれ位置する2つの区画での発掘作業およびドローンでの空撮測量を担当した。

●本事業の実施によって得られた成果

クエバ・デ・ラ・ピラミデ遺跡は昨年も発掘調査に同行させていただいた遺跡であり、その経験を生かして、昨年よりも主体的にプロジェクトに関わることができた。代表者として調査を指揮するために意識しなくてはならない、調査全体の進捗や時間管理などの重要性を学ぶことができた。また、調査地に近接する地域における自然地理的あるいは物質文化的特徴について知識を得ることができた。

ラクラプンタ、ワラパ、マルカマルカケパイナ、ミトゥマルカ、ニャウパマルカ、ナウヤンタンボの6遺跡では、博士論文として構想する議論において土台となるようなデータを収集することができた。ラクラプンタ、ワラパ、ミトゥマルカの3遺跡では、研究対象であるインカ帝国の時期に用いられていた特徴的な土器の一部が出土した。また、すべての遺跡の主要な建築において、建築が利用されていた当時の生活面と考えられる層から炭化物が出土した。これらの遺物の分析を進めることで、試掘調査を行った遺跡の詳細な利用年代に関する実証的な議論を行うことが可能になる。したがって、今回の調査では博士論文執筆に向けた研究を行う上で非常に大きな成果を上げることができたと考えている。また、今回発掘調査を実施した地域は現在に至るまで考古学調査が報告されていない研究の空白地帯であり、そのような地域に関する実証的データを獲得したことはインカ帝国研究に照らしてみても大きな意義があると位置付けられる。今回の調査で得られたデータは、今後報告者が国際的に研究発表を行なっていく上での基礎となるだろう。

また、クルスパタ遺跡の調査では、インカ期よりも古い時期のワヌコ地域の物質文化的特徴を直接知ることができ、将来に向けて視野を広く持ちながら研究を進めることの必要性を改めて認識した。また、建築を伴う遺跡の発掘に同行させていただくことができ、報告者自身が次年度以降に計画している、博士論文での議論の中心となる調査に向けて、建築との関係を慎重に観察しながら発掘を進めていく能力を向上させることができた。

●本事業について

昨年に引き続きフィールドワークを行うにあたって多大な援助をいただき、調査研究の大きな支えとなりました。今回の調査にてご支援をいただいたおかげで、博士論文の執筆、および今後の国際的な場での研究発信を行う上での基礎となる重要なデータを得ることができました。大変感謝しております。